

論文

マックス・ヴェーバーにかかわる二つの人事の実相(2)

——フライブルク大学移籍とハイデルベルク大学正嘱託教授案件——

野 崎 敏 郎

〔抄 録〕

ヴェーバーは、ベルリン大学法学部員内准教授に就任するための隷属的契約事項をすべて拒否する。さらに、フライブルク大学への移籍を拒否するよう強要されたヴェーバーは、ただちにアルトホフに抗議し、これにうろたえたアルトホフは、一転してヴェーバーの移籍の自由を認める。これを捉えて、アルンスペルガーとフライブルク大学は、意思統一を図り、ヴェーバーの割愛手続を執るようアルトホフに迫る。これにたいして、アルトホフは、ラーバント招聘計画の具体化を急ぎ、それまでの数カ月間サボタージュを続け、ようやく1894年3月に、ヴェーバーをフライブルクに《追放》することに決める。

キーワード：大学の自治、ドイツの大学行政、ヴェーバー、アルトホフ、ラーバント

Ⅱ-2 事実経過（その2）アルトホフによる就職妨害（続）

アルトホフによる隷属契約の企てとヴェーバーの拒否

ヴェーバーがアルトホフに送付した1893年8月5日付確認書兼暴露書簡の執筆動機について、彼自身が、後に次のように回想している（MWGI/13:406）。

帰宅する途中で、誓約書・確認書（Revers）のなかに、自分が引きうけておらず、また〔最初〕通読したときには書かれてもいなかったひとつの義務項目があとから加えられていることに気づいた。

マリアンネも、この書簡とその付帯事情について、次のように記している（LB 1:211 f., LB 2:230）。

この間^{かん}ヴェーバーは、アルトホフがヴェーバーの〔プロイセン〕残留を直接要求しない場合、自由な決定権を留保しておこうと望んだ。このときアルトホフがヴェーバーに提示した書面による誓約書・確認書 (ein schriftliches Versprechen) には、ヴェーバーをベルリン大学法学部に推薦するが、講師としての束縛はない (ohne Bindung für den Dozenten) と記されていた⁽³²⁾。ヴェーバーはこれを了承した。ところが、帰宅して封筒を開けてみると、彼がどこから招聘されてもそれを拒否することを義務づける追記があることに気づいた。彼が即座に送った抗議状 (sein sofortiger Einspruch) にたいする〔アルトホフの〕返書には、当該条項を誤りとして撤回する旨の回答が記されており、しかも実際よりも前の日付が偽装されていて、あたかもヴェーバーの抗議状〔がアルトホフに届けられる〕よりも前にこの返書が書きあげられたかのように見せかけられていた。事実はその反対だとヴェーバーは生涯確信していた。

ヴェーバーの回想とマリアンネの記述とを照合すると、封筒を開けてこの文書を読んだのが、前者では「帰宅する途中」、後者では「帰宅後」とされている点のみがわずかに食いちがっているが、それ以外は完全に合致している。この封入された文書は、アルトホフが書いた覚書であり、プロイセン文部省にたいするヴェーバーの誓約内容をしめすとともに、プロイセン文部省がヴェーバーの行動の自由を保証する確認書のはずであった。アルトホフは、この文書に、「講師としての束縛はない」こと、つまりプロイセン文部省から俸給を受けるからといって、他国の大学への移籍を妨げるものではないことを明記し、ヴェーバーにみせた。ところが、実際に封筒に入れてヴェーバーに手渡した文書には、こっそり「フライブルク招聘にかんする問い合わせに否定的な回答をなす」ことを書きくわえ、義務づけた。あるいは、あらかじめ誓約書・確認書を2通用意しておき、束縛がないとされているだけのものをヴェーバーにみせたあと、フライブルク招聘拒否を義務づけたものをそれとすり替えて封入したのかもしれない。いずれにせよ、アルトホフは、ヴェーバーがこの封筒を開封しないことを期待してこのような手段を執ったのである。常人の想像の外にあるアルトホフのこうした所業はなんとも卑劣で滑稽である。

三種類の念書とヴェーバーの拒否

8月5日に、アルトホフは、ヴェーバーに三種類の念書を押しつけようとした。

第一の念書は、確認書兼暴露書簡中に引用符つきで記されている内容であり、ヴェーバーはこれを糾弾し、拒否した。この対応については、後年彼自身が説明している (MWGI/13: 352 f.)。

私に要求された誓約書・確認書のなかには、どの大学からであれ、私に送られてきた「招

聘を拒否する」義務を負うことの承認という内容が含まれていた。このような内容は、〔アルトホフとの〕会見においては一言たりとも話題になっていなかったもので、私は、書簡によって、この不当な要求を免れた。

実際、すでにくわしく検討した確認書兼暴露書簡において、アルトホフによる不当な義務づけが暴露されており、ヴェーバーは、この書簡によって、この不当な要求を退けたのであり、これが、マリアンネの言う「抗議状」であることはまちがいない。

第二の念書は、秘密の交換証書（誓約書）⁽³³⁾である。アルトホフは、特別な証書に署名することを教員たちに強要していた。アルノルト・ザクセは、員内准教授たちに押しつけられていた証書を入手し⁽³⁴⁾、その一部を紹介している。そこにはあらかじめ次のように記されていた（Sachse 1928 : 187, 上山安敏 1968(5) : 36～37 頁）。

また、学問的力量を有する人々の理に適った分配のために、配置替えが適切であると考えられる場合には、〔プロイセン〕王国の他の大学の教員組織に〔自分の〕配置替えがなされることにたいして、小職が了承することを、前もって表明いたします。

この証書の内容は、大学教員を、どこにでも転属させることのできる一般行政官と同列視するものであり、ザクセは、アルトホフによるこうした束縛措置を、大学教員職を貶めるものと評している（Sachse, a.a.O. : 187 f.）。別の大学へと移籍することは当事者の自由であって、アルトホフにそれを制限する権限はなく、こうした証書は不当なものである。

ヴェーバーはこの証書への署名も拒否した。後年彼は、「ベルリン大学で任命されるさいに求められた（通例通りの書式に則った）どの『証書（Revers）』も拒否しました」と明言している（MWGII/7 : 307）。彼をなんとかしてベルリン大学法学部員内准教授職に就けようとしていたのはアルトホフのほうであり、これにたいしてヴェーバーは、——当然にも——これに署名するくらいなら拒否してフライブルクに行く構えである。だからアルトホフはこれを強要できなかったのである。

第三の念書は、ベルリン大学法学部における新たな科目担当を義務づけたものであり、これは不要であったので撤回された。この事情について、後年、新聞社宛書簡のなかで、ヴェーバー自身が次のように語っている（MWGII/13 : 310）。

講義委嘱契約に則った科目以外に、ゲルマン法関連講義をも受けもたなくてはならないという誓約書への署名を私は拒否し、〔この講義委嘱の〕秘密保持とその理由とにかんしてアルトホフ氏に言いそえましたのは、法学部の二人の教授、ブルンナー氏とギールケ氏が、私の任命に以前から賛成しておられたのは確かだということ、しかも、両氏には（また学部長

にも）私のほうから、私がゲルマン法関連講義を開講するつもりであることを詳細に伝えていたにもかかわらず賛成しておられたということです。これにたいして枢密顧問官アルトホフ氏は、それならこの件は片づいたと仰り、いくつか鉛筆書きのメモをお書きになりました。

アルトホフが、ヴェーバーに、商法関連の講義委嘱に加えてゲルマン法関連の講義をも受けもたせようとしたのは、ブルンナーとギールケの負担を軽減させるためだったと思われる。しかし同時にこれは、若い員内准教授が両教授の専門領域をいわば《侵犯》する行為でもあるので、ヴェーバーに念書を書かせるとともに、アルトホフは、両教授に根回しをしておこうと考えたのである⁽³⁵⁾。ところが、ヴェーバー自身が、すでに両教授と学部長にたいして、ゲルマン法関連の講義を受けもつ意思があることを表明していたことが判明したため、アルトホフはもはやこの念書を必要としなくなり、念書そのものを撤回した。

この第三の念書が撤回されたという事実は非常に重要である。というのは、この事実は、アルトホフとヴェーバーとが問題なく合意した事項にかんしては、念書・誓約書・確認書の類を作成する必要がないことを明示しているからである。逆に言うと、アルトホフがヴェーバーや他の教員たちに強要していた念書類の内容は、教員たちが忌避したがる事項なのであって、彼らが望む事項ではないのである。

確認書兼暴露書簡にたいするアルトホフの返書

アルトホフは、8月5日に、三種類の念書をことごとくヴェーバーに拒否されながらも、彼を強引にベルリン大学に縛りつけようとした。ところがアルトホフは、翌8月6日付とされている書簡において、突如態度を変え、ヴェーバーの移籍の自由を保証すると言明している（GStAPK/FA-1005:36, MWGII/7:308, Anm. 13）。

拝啓

昨日のわれわれの協議にたいして、なおいくつか付けくわえておきます。小職が書きとめておいた覚書の第2点に、貴殿が拘束されるものではありません。小職は、フライブルク〔招聘の件〕にかんして、むしろ完全に貴殿の自由裁量に任せること（*vollständig freie Hand zu lassen*）を希望しており、それゆえこの点にかんして、貴殿が完全にご自身の判断によって決断なさるよう願います。これにたいして、小職が覚書の第1点において貴殿に提示した見込みは、いかなる場合でも保持いたします。

敬具

アルトホフ

〔追伸〕 たったいま、昨日付の貴殿のご書状が届きました。小職は、昨日の貴殿の報告に

たいして感謝いたします。しかし、前述のように、フライブルクの一件にかんしましては、貴殿の自由裁量に任せることを希望いたします。

アルトホフのこの書簡は、彼がヴェーバーの移籍の自由を認めていることをすこしも意味しない。逆である。もしも実際に自由を認めているのなら、〈私は貴殿の移籍の自由を認めます〉などという自明の事柄について、そもそもこのような書簡を書く必要はない。アルトホフは、実際にはヴェーバーの自由を奪う項目をひそかに追記しておきながら、ヴェーバーの抗議に遭い、やむなく口では〈自由を認めますよ〉と取りつくろっているのである。

この書簡では、ヴェーバーの確認書兼暴露書簡に引用符つきで記されていた2点が、いずれも8月5日にアルトホフが書きとめた覚書(die von mir aufgenommene Notiz)からの抜き書きであることを、アルトホフ自身が認めている。このことから、アルトホフは、自分で書いた覚書を5日に封入してヴェーバーに手渡し、ヴェーバーはそれを写して引用符つきの確認書兼暴露書簡を作成したことが、疑問の余地なく明らかである。フライブルク大学招聘の件を謝絶するというのは、もちろんヴェーバーが希望していることではなく、アルトホフがヴェーバーの意思に反して命令した事項であることが、アルトホフ自身の言によって裏づけられている。したがって、この8月6日付とされている書簡もまた、アルトホフがヴェーバーを不当にベルリンに束縛していることをしめす明白な証拠である。アルトホフは語るに落ちた。

アルトホフの狼狽と日付偽装書簡の不可能状況

この短い返書に浮き彫りになっているのは、アルトホフが、ヴェーバーから送付された確認書兼暴露書簡を読んで、すくなくらずうろたえたことである。ヴェーバーは、アルトホフの覚書の卑劣な追記をいち早く察知し、これを逆手にとって、〈自分がベルリン大学法学部員内准教授に任命されることと、フライブルク招聘を拒否することとは、アルトホフが不当に自分に強要したことである〉という確認書兼暴露書簡を書いて送りつけたのである。これをみたアルトホフが狼狽したのは当然である。

この書簡は8月6日付とされているが、前記のように、マリアンネは、この書簡の日付は偽装されたと指摘している。

この書簡はたしかに奇妙で不自然である。短い本文があり、そのあとに追伸が付けられており⁽³⁶⁾、続けて読むと、〈フライブルク移籍はヴェーバーの自由であることをアルトホフが書きおわったとき、ちょうどそこへ誰かがヴェーバーの確認書兼暴露書簡を届けた〉といういかにも怪しい田舎芝居風のストーリーが拵えられていることがわかる。これは、ヴェーバーからの来簡が届けられるよりも前にアルトホフが自発的にヴェーバーの移籍の自由を認めていたこととするための偽装だというのがヴェーバー(夫妻)の判定である。

アルトホフのこの書簡が1893年8月6日に書かれたと仮定すると、おかしい点がある。そ

れは、追伸の冒頭にある「たったいま、昨日付の貴殿のご書状が届きました (Eben geht mir Ihr werthes Schreiben vom gestrigen Tage zu)」という記述の信憑性である。前日の——かなり長時間に及んだと推察される——アルトホフとヴェーバーとの会見のあと、ヴェーバーは、まずフライブルク大学に宛てて書簡を書き、そのあと確認書兼暴露書簡を書いて投函した。かなり遅い時刻に投函されたと推定されるこの書簡が、翌6日にもう配達されたのであろうか。しかもその6日は日曜日であり、この書簡は、アルトホフの私宅ではなくプロイセン文部省に配達されたものである。アルトホフは、日曜日に出勤していたのであろうか。また、日曜日に郵便配達員が文部省に來たのであろうか。さらに、仮に日曜日に郵便物が省に届けられたとしても、それがアルトホフのオフィスに届くことはない。なぜなら、郵便物の仕分けと分配を担当している文部省職員は、日曜日に出勤していないからである。週末に省に届いた大量の郵便物は、一時保管場所にうずたかく積まれたままで、月曜日にならないと仕分け作業はなされない。だから、日曜日にアルトホフのオフィスに誰かがヴェーバーからの来簡を届けることなどまったくありえない。

こう考えてみると、〈8月6日にアルトホフがこの書簡を書きおわったところに、誰かがやってきてヴェーバーの確認書兼暴露書簡を届けた〉というのは、やはり偽装工作だったと判定できる。そこで、この書簡を8月6日付(偽装)書簡と呼ぶことにしよう。実際に書かれた時期は、週明けの8月7日(月)以降にヴェーバーの確認書兼暴露書簡が届けられたあとである。

ベルリンの待遇にたいするアルンスペルガーの疑念

8月6日付(偽装)書簡に関連するメモのなかで、アルトホフは、年俸を2000マルクと見込んでおり、この当時、ベルリン大学員内准教授の初任給がこの額だったことがわかる。ところが彼は、ここから減額する可能性をも示唆している(GStAPK/FA-1005:37 a, MWGII/7:308, Anm.13)。このことは、7月26日付母ヘレーネ宛書簡中に記されていた「在職年数等々について」の懸念と関係があると思われる。ヴェーバーは、このときまでに、私講師として3学期間(一年半)勤務したにすぎず、ベルリン大学法学部内には、勤務歴が短い彼を員内准教授職に就けるのは時期尚早だという理由で難色をしめす人々がいた模様である。そこでアルトホフは、規程通りの初任給ではなく、減額することによって、法学部の了解を取りつけようと考えていたのであろう。

この待遇問題とかかわって重要なのは、アルンスペルガーの問い合わせ書簡中にあった記述である。既述のように、7月29日の会見のさいに、アルトホフは、ヴェーバーに、アルンスペルガーからの来簡をみせた。そのときアルトホフは、アルンスペルガーからの次の問い合わせに不快感を露わにしていた(MWGII/13:306)。

私のバーデン〔＝フライブルク大学〕への招聘が実現する前に、当時のバーデンの担当官であった上級参事官アルンスペルガー氏と、当時の枢密顧問官アルトホフ氏とのあいだで書簡が交わされておりました。まずバーデンの担当官が〔アルトホフ氏に〕照会したのは、私が求めにおうじてフライブルク大学に提出したベルリンにおける収入事情（Einkommensverhältnisse）にかんする一種の申告書が事実その通りであるのかどうかということでした。

上山安敏は、この「収入事情」にかんする申告書の問題について、ヴェーバーが「ベルリン大学の俸給に水増しして申告し、バーデン政府に高値をふっかけてた」かのようにアルンスペルガーが邪推したと解していた（上山安敏 1978：41 頁）。筆者も、以前はこの上山説を踏襲していた（野崎敏郎 2011：23 頁）。しかし、事実関係を再整理してみると、これはむしろまったく別の事態である可能性が高いことに気づいた。

7月26日付母ヘレーネ宛書簡のなかで暴露されていたように、アルトホフは、ヴェーバーにはフライブルクに赴任するつもりがないかのようなデマを、アルンスペルガーにたいして述べたてていた。ところが、ヴェーバーからバーデンに提出された申告書によって、ベルリン大学員内准教授の（予定されている）初任給が2000マルクであり、これはフライブルク大学正教授の初任給の半額にすぎず、それどころか、フライブルク大学員内准教授の初任給よりも低いことが判明した⁽³⁷⁾（表2）。これを知ったアルンスペルガーは、当然不審に思い、アルトホフにたいして、〈ベルリンの俸給はその程度なのですか〉と問いあわせた。そこには、〈そんな低い待遇なのにヴェーバー氏がベルリンにしがみつこうとするわけがないでしょう〉という文意が言外に含まれていた。

表2 ヴェーバーに提示された雇用条件（1893年8月の時点）

	フライブルク大学 (バーデン法務・文部省)	ベルリン大学 (プロイセン文部省)
職位	正教授	員内准教授
雇用期限	なし	国法学および商法の正教授ポストにラーバントが着任するまで
提示された俸給 (年俸)	4000 マルク (推定)	2000 マルク
諸手当	住居手当, 赴任手当	住居手当
特別な付帯義務	なし	①フライブルク大学からの招聘を拒否すること (後に撤回) ②アルトホフが、プロイセンの他の大学に転属せよと命じた場合には、それに従うこと (ヴェーバーが拒否) ③ゲルマン法関連の講義を担当すること (後に撤回)

このときアルンスペルガーは——当然にも——アルトホフの主張が作り話であることをすで見抜いていた。アルンスペルガーは、ベルリンの俸給額が高いことに疑念を抱いたのではなく、逆に、それが驚くほど低いことから、アルトホフの説明（ないし強弁）が成り立たないことを指摘したと考えられる。この鋭い指摘がアルトホフの逆鱗に触れ、彼は、ヴェーバーの前で、アルンスペルガーを悪し様に罵ったのである。

1893年8月6日付（偽装）書簡の意図①：ラーバント招聘との関連

この書簡が書かれた頃、アルトホフは、重要な課題に直面していたと推察される。それはラーバント招聘計画の軌道修正である。8月初旬は、学期末に差しかかっている時期であり⁽³⁸⁾、ラーバントの回想から逆算すると、この頃、アルトホフと、シュトラースブルクにおける授業活動に区切りをつけたラーバントとのあいだで、どのようなかたちでベルリンに赴任するのが協議されたと推察される。1893年夏学期において、グナイストをはじめとするベルリン大学法学部の教授たちがラーバントの赴任に難色をしめしていることが明らかであり、そのことはヴェーバーの書簡記述からも窺い知ることができる。アルトホフとエックからこの状況を伝え聞いたラーバントは、いきなり法学部正教授に就任するのではなく、別のかたちで赴任することを希望したのであろう。その結果、アルトホフは、ラーバントを、まずベルリン大学法学部員内嘱託教授兼ベルリン上級行政裁判所判事として招聘するという案を思いついた。この案の実現可能性と妥当性について検討し、また裁判所長に打診するなど、各方面の調整をおこなったうえで、アルトホフは、翌1894年3月に、この案をラーバントに伝えることになる (Laband 1980: 96)。これについては後述する。

ここで重要なことは、員内嘱託教授職が、ヴェーバーに職務を代行させる予定の国法学および商法の正教授ポストとは無関係だということである。国法学および商法の正教授ポストは常設されており、ゴルトシュミットが退任（死亡退職を含む）すれば、後任を任命しなくてはならない。それを誰にするのかをめぐって、法学部とアルトホフとのあいだで激しい駆け引きが生ずることは避けられそうにない。しかし、員内嘱託教授職なら、常設のポストではなく特設の職位だから、ゴルトシュミットの後任問題とは——直接には——連動しない。ラーバントがベルリンで員内嘱託教授として精勤し、研究・教育・人望の各点において法学部教員たちの信頼を得られれば、後年正教授として任命される——つまりゴルトシュミットのポストを継ぐ——可能性がみえてくる。アルトホフはこう考えたのである。

こうしたアルトホフの想定下におけるラーバントの動向とヴェーバーの処遇との対応関係を一覧にしておく (表3)。アルトホフにとって、なによりもまずラーバントのベルリン招聘が重要なのであって、ヴェーバーの処遇は二次的な問題にすぎない。アルトホフは、ラーバントの動静におうじてヴェーバーの処遇を決めようとしているのである。

表3 ラーバントの動静とヴェーバーの処遇との対応関係

1893年夏時点でアルトホフが想定しているラーバントの動静三態	ラーバントの動静に対応するヴェーバーの処遇	ヴェーバーの勤務地（転任先）
①ベルリン招聘失敗、シュトラースブルク大学法学・国家学部正教授に留任（ベルリンの国法学および商法担当正教授ポストは空位のまま）	①員内准教授として勤務継続（国法学および商法担当正教授の職務を代行するため）	①ベルリン大学法学部
②ベルリン大学法学部に員内嘱託教授として就任（ベルリンの国法学および商法担当正教授ポストは空位のまま）	②員内准教授として勤務継続（国法学および商法担当正教授の職務を代行するため）	②ベルリン大学法学部
③ベルリン大学法学部に正教授（国法学および商法担当）として就任	③員内准教授から免職（ラーバントが国法学および商法担当正教授に就任し、その職務を代行する必要がなくなるため）	③転任先未定（フライブルク大学も可）

員内嘱託教授の事例：シュテンゲルの場合

筆者は、員内嘱託教授という職位の基本性格を、ハイデルベルク大学の農学者アードルフ・シュテンゲルを事例として、すでに解明した。このケースは、アルトホフがラーバントを員内嘱託教授に任命しようとする意図を理解するために非常に有益なので、ここに略述しておく。

シュテンゲルは、カールスルーエ工業高等専門学校農業専門校の教授だったが、1872年に同校が廃止され、ハイデルベルク大学に吸収統合されたため、同大学哲学部内に新設された農業部門に配属された。しかし、哲学部側は、突然外から教授が横滑り式に赴任してくることにたいして反発し、シュテンゲルを正教授として勤務させることに難色をしめした。そこでバーデン政府は、彼をひとまず員内嘱託教授として勤務させることにした。そして2年間精勤したシュテンゲルは、学部の信頼を得て、1874年に正教授に就任している（野崎敏郎 2011: 154～155 頁）。

員内嘱託教授職は、属人的かつ一時的職位であり、国庫から俸給が支給されるが、学部教授会のメンバーシップをもたない。シュテンゲルのケースでは、当該学部が彼を正教授として認めるまで、彼を試用するという位置づけである。そしてラーバントのケースにおいてもまた、ベルリン大学法学部に彼を認めさせるための試用期間の職位として、員内嘱託教授職が設定されているのである。

この員内嘱託教授案（表3の②に該当）を採用すると、ラーバントをいったんこの職位に就けたあと、頃合を見計らって彼を法学部正教授に任命することになり、そのときヴェーバーをフライブルクに放出することが可能になる。そこでアルトホフは、ヴェーバーの移籍の自由を——すくなくとも表面上は——認めることにしたのであろう。

1893年8月6日付（偽装）書簡の意図②：ヴェーバー追放の可能性

8月5日付確認書兼暴露書簡の内容から、7月29日と8月5日の激しいやりとりのなかで、アルトホフは、ヴェーバーをなにがなんでもベルリンに縛りつけるという態度をとっていたことがまったく明らかだが、その後彼は、ヴェーバーの処遇にかんしても軌道修正をすべきだと気づいたようである。というのは、もしもヴェーバーがベルリン大学法学部に居座りつづけると、アルトホフにとって、これもまた不都合だからである。アルトホフは、ヴェーバーを員内准教授として勤務させることによって、ベルリン大学法学部の当面の教育需要を満たすことにしているが、国法学および商法の正教授ポストを誰に授与するのかは依然として重要な懸案であり、またこの学部他の人事案件も勘案すると、ヴェーバーを早期に他の大学に移籍させる必要が生じる可能性もある⁽³⁹⁾。そこで、ヴェーバーとの確認事項を《緩い》ものにとどめておくのがアルトホフにとって得策である。またそうした《緩い》条件にしておかないと、ヴェーバーを勤務させることはとうてい叶わない。現に、前記のように、束縛的な項目にたいして、ヴェーバーから激しい抗議を受けている。そこで考えなおした結果が、当該の8月6日付（偽装）書簡である。なにしろ、アルトホフがヴェーバーに突きつけた契約条件は、〈私が勤務せよと命じているあいだは、お前はベルリン大学法学部に勤務せよ。そして私が辞めよと命じたら、お前は即刻辞めよ〉という途方もなく身勝手なものであった。このような隷属契約では、ヴェーバーでなくとも、誰も勤務しようとしなのは当然である。

1893年8月6日付（偽装）書簡の意図③：自己保身のためのマヌーヴァー

もうひとつ、こうした隷属的条件を無理に押しつけると、それが外部に漏れたときに、自分の責任が問われることになることを、明らかにアルトホフは恐れている。なんといっても、すでにバーデン法務・文部省とのあいだで紛糾が生じており、アルンスペルガーは、アルトホフの法外な身勝手ぶりに辟易している。二つの邦国の文部行政担当省のあいだで起きた紛糾は、新聞にとって恰好の記事材料であり、その紛糾がアルトホフの専横とデマ宣伝と不正な秘密契約によるものであることが暴露されると、自分の官僚としての地位が危うくなる。そこで、表向きは、〈私は貴殿の移籍の自由を認めていますよ〉と取りつくろうことにしたのである。彼がこの8月6日付（偽装）書簡を書きおくれた理由は、それをヴェーバーに読ませるためという以上に、この書簡の控えを保存しておき、あとあと問題視されたときに弁明できるようにしておくためであり、これはそうしたマヌーヴァー書簡なのである。そして現に、この書簡を読んだザクセと今野元は、アルトホフが仕掛けたこの罠にまんまと引っかかった（後述）。

以上の考証によって、8月6日付（偽装）書簡におけるアルトホフの表面上の翻意を合理的に理解できる。この書簡は、ベルリン大学法学部の国法学および商法の正教授ポストを当面塞いでおく《緩い蓋》としてヴェーバーを利用し、ラーバントの招聘に成功すれば、ただちにヴェーバーを退かせるという条件を確認しておくとともに、アルトホフ自身の保身を図るための

リスク回避策という意味をも有していたのである。アルトホフの奸智にあらためて《脱帽》せざるをえない。しかしアルンスペルガーは、以下にみるように、この書簡を逆手にとり、ヴェーバーのフライブルク招聘を実現へと導くのである。

Ⅱ-3 事実経過（その3）バーデン政府による 招聘決定とアルトホフのサボタージュ

結婚式・新婚旅行前後のヴェーバーとバーデン側の動向

9月20日、ヴェーバーはマリアンネと結婚式を挙げ、新婚旅行の後、新学期に備える。そして1893/94年冬学期に——ヴェーバーとしては不本意ながら——ベルリン大学法学部員内准教授に就任する。アルトホフが頑迷な態度を崩さないことと、ベルリン大学法学部の教育需要とを考慮したヴェーバーは、員内准教授職に就くことを受諾したが、このとき彼の脳裏には、できるだけ早期にフライブルク大学に移籍するというストーリーが描かれていた。1893年3月以来、ヴェーバーとアルンスペルガーとフライブルク大学哲学部の三者は意思疎通を保っており、彼らは、アルトホフの策動を冷やかにみながら、最終的な決断の機会を窺う。

この頃、アルンスペルガーとフライブルク大学は、アルトホフが依然として荒唐無稽な作り話にしがみついているのをみて、もしもいま招聘を強行すると、アルトホフの強い反発を招き、かえって事がうまく運ばなくなることを危惧したと思われる。そこでフライブルク大学は、10月頃まで待ち、次にしめすように、ヴェーバーにたいして、フライブルク大学就任受諾の意思表明をなすよう求め、同時にバーデン政府（大臣）にたいしても新たな請願をおこなう。

1893年10月書簡の意味するもの

10月（8日から24日までのあいだ）に、ヴェーバーはアルトホフに書簡を送っている⁽⁴⁰⁾（MWGH/2: 475 f.）。冒頭に、アルトホフが「くりかえし（wiederholt）」厚情を表明したと記されているので、新婚旅行から戻ってきた彼は、溜まっていた郵便物のなかに、アルトホフからの来簡を複数みつけたことがわかる。

謹みまして、閣下が小職にくりかえしご表明なさいました大いなるご厚情にたいする信頼の証として、以下のようにご報告申しあげます。

小職がフライブルク大学〔哲〕学部側から受けとった新たな緊急の要請状は、小職が同学部の正教授職に就任する意思を表明することを求めています。なぜなら、同学部は、新たな緊急の請願書を〔バーデンの国務〕大臣〔＝ヴィルヘルム・ノック〕に提出し、大臣が直々に〔プロイセン側にたいして〕小職の即時補任を求めることを企図しているからです。

これにたいして、「小職は、もはや転出についてのなんらかの交渉に入ることのできる立場にない」と小職は回答しましたが、数日前、再度の緊急要請状を受けとり、そこには、小職の当地〔＝ベルリン〕における〔員内准教授職への〕就任が困難に直面している模様であり、いずれにせよまだ就任が確定していないということが指摘されておりました。同種の要請状は、今後もくりかえし送られてくることでしょう。

もしも実際に閣下が困難に直面しておられるなどということであるとすると、それは、目下小職にとりまして当然にも最大級の重要性を有する事柄になることでしょう。前々から申しあげておりますとおり、〔ベルリン大学法〕学部は無条件で同意を与えているわけではないので、たしかにこの可能性は排除されていないからです。そしてあえて申しあげますと、小職にとりましてまことに不快なこの案件において、小職がどのような態度をとるのかについて、枢密顧問官エック氏の意見を伺い、同氏の助言にしたがって、慎みまして、閣下に以下のようにお願いいたします。もしもこの案件がそういう状況であるとするならば、小職にこれにかんする示唆をお送りいただくご意向をお示し賜りますように。なぜなら、この場合、当然にも、小職は、自分の関心にしたがって、いかなる犠牲を払っても、可能なかぎり早い時期にベルリンから去ることを可能にする努力をしなくてはならなくなるからです。

〔これにたいして、ベルリン大学人事にかんして〕なんの困難も生じていない場合、この〔小職の〕問い合わせにたいして、当然にも回答していただく必要がなく、この問い合わせについて、閣下が、小職に関連する未決の問題事項の早い解決を〔小職が〕催促する試みをなしていると解することはないだろうと小職は信じております。

冒頭の「大いなるご厚情」という痛烈な皮肉から、ヴェーバーにたいして、数次にわたって、フライブルクからの招聘に応じないように——つまり当面ベルリンに留まるように——アルトホフが求めていたことがわかる。これはそれにたいする返書である。

重要なのは、ラーバント招聘をめぐるアルトホフとベルリン大学法学部とのあいだの紛糾が収拾できないようなら、ヴェーバーは、「いかなる犠牲を払っても、可能なかぎり早い時期にベルリンから去る」強固な意思をもっていること、またそれは「自分の関心にしたがって」おこなう「当然」の行為であると明言していることである。

ヴェーバーのこの言明はまた、裏を返せば、アルトホフには、ヴェーバーを将来にわたってベルリン大学で任用するつもりなどまったくなく、とりわけ彼をベルリン大学正教授に任命することなどまったく考えていないことを、疑う余地なく明示している。

そもそも、アルトホフがヴェーバーに押しつけているベルリンの職位（員内准教授職）は、ラーバントがゴルトシュミットのポストを継ぐまでの暫定的な性格のもの——一時しのぎのための職位——にすぎない。このことをヴェーバーは明確に自覚しており、ラーバントがベルリンに移籍してくれば、自分は、アルトホフによって、プロイセンの他の大学——たとえばマー

ルブルク大学——の員内准教授職へと異動させられることになるのだから、そのような不安定な境遇に甘んじるよりも、「自分の関心にしたがって」フライブルク大学に正教授として移籍することをめざすのは、当然すぎるほど当然である。この書簡は、こうした事実関係とヴェーバーの態度とを疑問の余地なく明示している。

「当然にも (selbstverständlich)」の三連発をとまうこの書簡において、ヴェーバーは、8月の確認事項を踏まえ、アルトホフが職務に誠実であるならば当然にも執らなくてはならないその職務内容を突きつけている。8月6日付 (偽装) 書簡において、アルトホフは、ヴェーバーのフライブルクへの移籍の自由を認めざるをえなかった。ヴェーバーは、これを捉えて、もしもベルリン大学法学部人事が紛糾しているようなら——つまりヴェーバーによる職務代行に続いてアルトホフが企図しているラーバント招聘にベルリン大学法学部教授陣が同意を与えず、この招聘計画が難渋しているのなら——、ラーバント招聘の実現を待たずに、自分はこの移籍の自由を行使することを言明し、当然にもアルトホフがこれを認めるよう求めている。じつに当然にして賢明な意向表明である。既出の7月26日付母宛書簡においても明記されていたように、アルトホフとベルリン大学法学部教授陣とのあいだの「まことに不快な」紛糾にたいして、ヴェーバーが、いづれの側からも距離を置くというスタンスをとっていることが明らかである。

興味深いのは、フライブルク大学哲学部も——したがってアルンスペルガーも——、ラーバント招聘をめぐるベルリンの紛糾にかんする情報を得ていることである。バーデン側は、アルトホフが、ヴェーバーをたんなる持ち駒——しかも捨て駒——として利用しているにすぎないことを正確に察知し、ラーバント招聘計画が滞っているようなら、アルトホフの策動など無視してフライブルクに来るべきことをヴェーバーに勧めている。

実際、ヴェーバーがベルリン大学法学部員内准教授に公式に任命されたのは11月25日のことである (MWGII/2: 477)。冬学期任命の場合、10月1日付で着任するのが通例だから、公式任命日がそれよりも二カ月近く遅いのはやはり不自然である。法学部側がアルトホフの策動にたいして難色をしめし、それが公式任命の遅れを引きおこしたのではなからうか。

この書簡中で「もはや～ない (nicht mehr)」と書いているのは、ヴェーバーが、もはや私講師ではなく員内准教授に着任する予定だからである。私講師はあくまでも学部任用されている教師であって、文部省から指図される謂れはないが、員内准教授は国費からの給付を受ける存在なので、員内准教授職からの離脱——同時にプロイセンからの離脱——のためには、プロイセン文部省の承認を得るのが望ましい⁽⁴¹⁾。ヴェーバーは、各方面への気配りを欠かさない人士であり、彼は、ベルリンとカールスルーエとのあいだで紛糾が続くことを望まず、ベルリン大学法学部の教育上の要請にも、フライブルク大学哲学部のスタッフ事情にも配慮している。彼自身の身の振りかたとしては、すでにフライブルク移籍を決めているが、各方面に支障のないよう、またなるべく円満に移籍することを希望しているのである。

1893/94 年冬学期におけるフライブルク大学とアルンスベルガーの動向

1893/94 年冬学期中に、フライブルク大学哲学部は、この問題にどう対処すべきか、協議を重ねている。そして 12 月 13 日に、哲学部は、政府にたいして、あらためて第 1 位にヴェーバーを、第 2 位にフックスを推薦する (GLA 235/43005)。また 12 月 16 日には、同大学法学部が政府への意見書を提出しており、そのなかで、法学部学生の教育上、経済学教育が不可欠であり、学生側の要望も大きい、現状ではその需要を満たすだけの人的配置がなされておらず、とくに国家試験の必須科目にかんする専門家が不在であるため、教学上の支障を来し、学生数確保という点からみても問題が大きいので、すみやかに善処することを求めている (ebd.)。

12 月 19 日には、哲学部が、再度ヴェーバー招聘の意向を表明し、12 月 21 日には、哲学部と法学部の意見書を受け、大学評議会が政府への要望書を出す。これにたいしてバーデン法務・文部省は、12 月 27 日付で、2 名ではなく 3 名の候補のなかから選定するため、新たな推薦リストを提出することを求める (ebd.)。この大学評議会宛指示書において、「状況が変わったなかで (unter den veränderten Verhältnissen)」正教授を選定することが明言されている。この状況の変化と言われていることが、具体的に何を指しているのかはかならずしも明確でないが、おそらく、10 月のアルトホフ宛書簡中でヴェーバーが記していたように、プロイセンの員内職位に就けられたヴェーバーをノック大臣が直々に任命することも辞さないという構えができた——つまりノック自身が腹を決めた——のであろう。

バーデン政府がこのとき明確な態度表明をなしたのは、翌年 4 月 1 日にヴェーバーを着任させるためである。プロイセン文部省が大学教員に提出させていた宣誓書には、他大学への招聘におうじて他出するさいには、「三カ月の事前解約予告期間を経ってから (nach vorgängiger dreimonatlicher Kündigung)」とすべきことが記されていた⁽⁴²⁾。バーデン側は、これを踏まえ、1893 年末までに最終的な態度を決め、アルトホフにヴェーバーの割愛を迫ったのである。

ヴェーバーをプロイセンに囲いこもうとしているアルトホフの意向を無視したバーデン側のこの決定は、アルトホフの面目を潰すことを意味する。これによって、アルンスベルガーとアルトホフとの関係はますます悪化し、それは、バーデンにおけるあれこれの大学人事に悪影響を及ぼすことが懸念される。とくに、これ以後、プロイセン管轄下の大学にいる有能な人材をバーデンに引きぬくことを、アルトホフがいっそう激しく妨害することが予想されるのだが、バーデン側は、当該案件にかんして、ヴェーバー招聘以外に選択肢がなく、機は熟したと判断して、果断に決定を下した。アルトホフがプロイセン政府内でいかに強大な権限を与えられていても、他国の文部行政担当大臣が直々にヴェーバー招聘の意向を表明しているのに、それを無視することはできないはずである。

哲学部は、バーデン政府の求めにおうじて、1894 年 1 月 20 日に、新たな推薦書を作成しており、そこでは第 1 位ヴェーバー、第 2 位エルスター、第 3 位オルデンベルクとされてい

る(MWGII/7: 288)。しかし1月24日に、大学評議会は、政府にたいして、あくまでもヴェーバーのみをつよく推薦する(GLA 235/43005)。

アルトホフのサボタージュと奇怪な弁明はぐらかし返書

ヴェーバーが1893年10月に送ったアルトホフ宛書簡(前出)からわかるように、遅くとも彼がベルリン大学法学部員内准教授に就任する前後の時期から、すでにアルンスペルガーとフライブルク大学は、仕切り直しのうえ、あらためてヴェーバーの割愛をアルトホフに求めてきた。そしてバーデン側は、年末までに、各方面の意思統一を固めたうえで、正式にヴェーバー招聘を決定してアルトホフに通告した。そしてヴェーバーもそれを切望している。これにたいしてアルトホフが拒否する理由はない。ところが、このときアルトホフが執った手立ては——驚くべきことに——数カ月にわたるサボタージュであった。

アルトホフが通例通りに割愛手続を執れば、ヴェーバーは1894年4月にフライブルク大学に着任できる。しかしアルトホフは、なお割愛の引き延ばしを図った。そこでアルンスペルガーは、1894年2月10日付でアルトホフに問い合わせ書簡(督促状)を送り、どうなっているのかと問い質した⁽⁴³⁾。それにたいするアルトホフの2月19日付返書が次のものである(MWGI/13: 319 f., Anm.2)。

今月10日付の貴官の問い合わせにたいしまして、謹んで〔二点〕お答え申し上げます。〔第一に〕フライブルクへの招聘にさいして、教授ヴェーバー氏にあっては、選択が完全に自由に委ねられるであろうこと、また〔第二に〕本省としましては、同氏が最近ベルリンにおいて員内准教授職に任ぜられたという事情から、同氏にはこの招聘を拒否する義務があるという帰結を導き出そうとするつもりは毛頭ないということであります。もしも同氏ご自身が、某氏⁽⁴⁴⁾とは異なって、上級官庁との事前了解なしに決断を下すことに逡巡する気持ちを抱いておられるとすれば、たしかにそれは同氏にとって名誉になります。しかしながら、同氏が自由に決断なさるさいになんらかの支障が生じることは、かえって本省の業務にうまく適合しなくなることでしょう。教授ヴェーバー氏は、あらゆる面できわめて卓越した人物ですから、本省は、同氏にただもう最善の結果を望むのみでありまして、いずれにせよ、同氏の今後のご発展にとってなにが最善であるのかについての同氏ご自身のご意見を、なんらかの方法で先取りすることにかんしまして、本省が責任を引き受けることはできかねます。

最初に書かれている二点は、アルンスペルガーからの「問い合わせ」(＝督促状)に直接対応している。その内容から、アルンスペルガーは、アルトホフがヴェーバーに送った1893年8月6日付(偽装)書簡の内容をヴェーバーから知らされていたことが明らかである。この前年8月の書簡中で、アルトホフが、ヴェーバーの移籍の自由を保証すると述べていたことを

逆手にとって、アルンスペルガーは、2月10日付督促状において、ヴェーバーには選択の自由があること、また、ベルリン大学法学部の現職の員内准教授であるからといって、フライブルク大学からの招聘を拒否する義務はないことを主張し、アルトホフにこれを認めさせたのである。アルンスペルガーのみごとな手腕が発揮されている。

アルトホフの返書を読んでただちに看取されるのは、彼が依然としてヴェーバーの移籍の自由を侵害していることである。〈ヴェーバー氏の移籍の自由を私は保証します〉という書簡記述は、移籍の自由を実際には奪っていることをしめす証拠である。もしもほんとうに移籍の自由を認め、移籍のための手続をすすめているのなら、具体的に、何月何日までにプロイセン文部大臣の裁可を得て、バーデン側に通知する等々と述べるのが当然である。ところが、この弁明書簡にあっては、そうした具体的な言質が故意に回避され、はぐらかされており、アルンスペルガーの要求になんら応えていない。それどころか、フライブルク招聘を受諾するか拒否するかについて、なにかヴェーバーが決断を逡巡しているせいで、プロイセン文部省の業務(Praxis)が滞っているかのような驚くべき虚構が拵えられている。実際には——すでに本稿において点検してきたように——、ヴェーバーは、1893年6月20日頃から一貫して、ベルリンを去ってフライブルクに移籍することに決めているのであり、そこにはなんの「逡巡(Bedenken)」もない。そしてアルトホフは、こうしたヴェーバーの断固たる意向を、ほかの誰よりもよく承知しているのである(!)。

しかもアルトホフは、この書簡中で、「上級官庁との事前了解」がないことを述べている。これは語るに落ちた決定的な発言(失言)である。ヴェーバーのフライブルク移籍を、「上級官庁」を取りしきっているアルトホフが了解していないことを認めてしまっているからである。アルトホフは、1893年8月6日付(偽装)書簡において、ヴェーバーのフライブルク移籍を認めるかのような言辞を弄していたが、本心ではやはり移籍の自由を認めていないことが露わになっている。

1894年2月19日付のこの返書は、アルンスペルガーの督促状が書かれてから9日も後の日付をもって書かれている。督促状が書かれたのは2月10日(土)であり、当時の郵便事情から考えて、週明けの12日か13日にはベルリンに届いたはずである。まともな文部官僚なら、他国の文部官僚からの督促状が届いてから一週間も放置することなく、届いた当日か翌日には、〈ただちにヴェーバー氏の意向を確認し、同氏がフライブルクへの移籍を希望するなら、すぐに割愛手続をとります〉と書きおくるはずである。しかしアルトホフは、そもそもこの督促状にまともに答えず、ヴェーバーの意向を確認しようともしていない——例によって自分の執務室にヴェーバーを呼びつければ済むことなのに(!)——。この異常な対応にあきれたアルンスペルガーは、自分の督促状とそれにたいするアルトホフの奇怪なはぐらかし返書について、ヴェーバーに知らせている(MWGI/13: 319)。アルンスペルガーの心境としては、〈アルトホフ閣下が、今度はこんな滑稽な書状を私に送りつけてきた。いったいいつまでサボター

ジュを続けるつもりなのか見当がつかない」といったところであろう。

フライブルク大学への招聘決定からずいぶん時間が経っているのに、まだ移籍のための手続が執られていないから、アルンスペルガーは不審に思っ^て督促した。それにたいしてアルトホフは、なお時間稼ぎをするために、具体性を欠く返書によって取りつくろい、移籍手続が滞っている責任をヴェーバーになすりつけた。アルトホフは、ヴェーバーの移籍の自由を認めているかのような振りをしながら、依然として割愛手続をとろうとしなかったのである。このことから、このときアルトホフが、バーデン政府からの督促を無視し、別の事柄を優先的に考慮していたことが明らかである。それはラーバント招聘計画の練り直しである。

II-4 事実経過(その4) ラーバント招聘計画の確定とヴェーバー追放

アルトホフとラーバントとの協議

アルトホフは、ヴェーバー割愛を保留しつつ、ラーバントをベルリンに招聘するための新たな手立てを講じることに腐心していた。ラーバント自身の回想によると、1894年復活祭休暇中に——つまりアルトホフの弁明はぐらかし書簡の約一カ月後に——、ラーバントとアルトホフらとの協議の機会が設けられ、そこで、プロイセン上級行政裁判所の判事として(事実上グナイストの後任として)招聘され、同時に、嘱託教授⁽⁴⁵⁾として、ベルリン大学法学部で教鞭を執るという条件が提示された。ラーバントは、ベルリン大学法学部が自分を歓迎するかどうか、疑念を抱き、自分の招聘にたいする反対運動など、多々困難が生じることを懸念したが、これにたいして、プロイセン上級行政裁判所長パウル・ベルジウスは、あらゆる善処と、裁判所の任務の軽減とを約束した。しかしこの頃になると、ゴルトシュミットの病状が重く、復帰できないことが確実視されており、その場合、ラーバントは、やはり国法学および商法の正教授に任命されることになる可能性が非常に高い。そうすると、正教授と判事とを兼務するのは荷が重すぎるので、結局ラーバントは、裁判所の任務を免除してもらったうえで、ベルリン大学法学部に正教授として赴任すること——つまりゴルトシュミットのポストを継承すること——を希望した。アルトホフもこれを了承し、この条件でラーバントを招聘するために尽力することになる(Laband 1980: 96 f.)。

こうして、1894年3月に、ラーバントのベルリン招聘に向けて、事態は大きく動きはじめる。そして重要なことは、最終的に合意された条件による招聘、つまり員内嘱託教授としてではなく、国法学および商法を担当する正教授としての招聘が実現すると、ラーバントの就任にともな^{って}、前任者ゴルトシュミットの職務であ^{った}商法講義等を代講している員内准教授ヴェーバーの存在が邪魔になることである。またヴェーバーは、前年10月の書簡(既出)において彼自身が明確に表明していたように、フライブルクへの早期移籍の意向を堅持しているの^で、アルトホフが命じてマールブルク大学あたりの員内准教授に転属させるのは困難であり、

要するにプロイセンで任用しつづける見込みがない。そこでアルトホフは、ラーバント招聘計画が具体化すると即座に (!), 自分の言うことを聞こうとしないこの頑固な員内准教授を《用済み》としてプロイセンの域外 (=バーデン) に追放することを決めたのである⁽⁴⁶⁾。

アルトホフは、ようやくヴェーバーの割愛手続を執る。それは、ラーバントのベルリン招聘が本決まりになったことを受けた事態であり、また、アルトホフがヴェーバーのプロイセン内への引き留めを最終的に断念したことを明示した事態でもある。

バーデン側の動向とヴェーバー割愛の通知

ヴェーバーは、1月から3月末にかけて、アルトホフのサボタージュが続いているのをみており、アルンスペルガーからは、2月10日付でアルトホフに督促状を送ったことと、アルトホフから木で鼻を括ったような返書が来たことを知らされているが、移籍手続は執られないままであった。この状況から、4月にフライブルクに移籍することはむずかしそうだ判断したヴェーバーは、次学期もベルリン大学法学部で授業を担当することを想定し、準備をすすめたと推察される。そして3月1日から4月25日まで、彼は歩兵連隊の予備将校としてボーゼンで軍務に就く。

3月17日付妻宛書簡のなかで、ヴェーバーは、オットー・バウムガルテンからの情報として、フライブルク大学が、ユーリウス・ヨリューに委託してヴェーバーの意向を探るなど、なんらかの動きをしめしていることを記している。ヴェーバーの従兄であるヨリューはバーデンで検事職に就いており、バーデン側は、アルトホフによるヴェーバーの移籍妨害にたいして、なんらかの法的な手段を執ろうとしていた可能性が高い。ただし、ヴェーバー自身は、親戚筋の者を通じてこうした水面下の工作をおこなうこと⁽⁴⁷⁾を好まなかった (MWGII/2: 509)。

アルトホフが、3月におけるバーデン側のこうした動きを察知していたかどうかは確認できない。もしも察知していたとすると、彼は、自分がヴェーバーの移籍を妨害しつづけていることが公になり、このスキャンダルによって自分の官僚としてのキャリアが危うくなることを当然恐れたはずである。3月にラーバントの意向を確認し、ベルリンの招聘条件を確定し、招聘の段取りを固めたのは、アルトホフ自身の《尻に火がついた》状況下で、大至急決めなくてはならないことだったのであろう。

その後ヴェーバーは、カールスルーエからなかなか回答が来ないことに苛立つあまり、いっそフライブルク招聘を拒否しようかとも考える (1894年3月27日付妻宛書簡, ebd.: 517)。しかしその頃、ようやくアルトホフがヴェーバーの割愛を認め、バーデン法務・文部省に通知した模様である。ヴェーバーは、1894年4月3日付母宛書簡において、「たったいまフライブルクからの招聘状を受けとった」ことを明かしており (ebd.: 523), また同日付でアルトホフ宛に次の書簡を書いている (ebd.: 521 f.)。

いしましたが、小職をフライブルク大学国民経済学正教授として招聘する旨の通知が届けられましたことを謹んでご通知申しあげ、場合によっては来る秋に小職がこれを受諾することをご許可賜りますようお願い申しあげます。

閣下は、〔フライブルク〕招聘の件につきまして、小職があらかじめ直接申し述べたいと思っていた願望を、かの折に直々にご表明なさいました。そして小職は、閣下が〔訪問を〕無用だとか判断なさらない場合には、小職が休暇⁽⁴⁸⁾をとることが見込まれる金曜日〔=4月6日〕に、閣下を表敬訪問いたしたく存じます⁽⁴⁹⁾。

さらに申しあげますと、小職は、待遇の向上を目的として、〔フライブルク移籍の〕申し出が正当であるとか動機づけられたとか考えているのではけっしてありません。唯一の重要な理由は、小職にとりまして、フライブルクの職位の受諾が重要でありうように考えられ、また実際に重要であることです。この理由は、小職の将来的な立ち位置の問題のある性質なのです。小職が関心を寄せている諸領域〔=経済学的諸領域〕の特性にあっては、終身職として設定されている地位〔=正教授ポスト〕が、いつか法学部内で小職に得られることが容易でないという事情に口を噤んでいるわけにはいかないのです。——閣下は、格別のご厚情をもって、小職にとってまったく当然の分野〔=法学分野〕において、小職を講師として試してみる可能性を拓いてくださいましたので、もちろんだ小職自身の個人的関心にのみかかわるにすぎないこうした観点をも、閣下にお伝えし、またこの機会をも考慮に入れ、閣下のご厚情あるご決定を懇請する次第でございます。

「かの折に (s.Z.)」というのは、1893年8月6日付(偽装)書簡のことである。ヴェーバーの確認書兼暴露書簡(抗議状)に遭遇し、アルトホフは移籍の自由を認めざるをえなくなり、これを捉えて、ヴェーバーとアルンスペルガーがフライブルク移籍を勝ちとったことが、ここにあざやかにしめされている。ヴェーバーが要求している「閣下のご厚情あるご決定 (Ihr wohlwollender Rath)」は、もちろん割愛手続の即時執行を意味している。ヴェーバーは、ここでも再度、若手研究者を員内准教授のまま不安定な低待遇で雇用しつづけようとするアルトホフの策略を退け、「終身職」である正教授職を用意したフライブルクに赴くというみずからの選択理由を明示している。

この書簡を、これまでの経緯に照らしあわせて読んでみると、これは、〈閣下は小職の移籍の自由をしぶしぶお認めになりましたし、なにか小職が待遇向上のためにフライブルクを利用しているかのような閣下のデマ宣伝をバーデン側は信じませんでしたし、閣下は、小職が望んでいる経済学系の正教授職を法学部内で用意するおつもりはないのですから、もはや悪あがきを止め、即刻小職の割愛手続を執るようお願いいたします〉という趣旨だとわかる。痛烈な皮肉に満ちた要求書である。

後年、ヴェーバーは、この書簡を書いたときを振りかえって、次のように述べている

(MWGI/13: 315)。

結局人々は、それぞれ個々に彼〔＝アルトホフ〕に対処するしかなかったのでした。私自身も、別れにさいして、非常に心を込めて、〔彼の〕支援すべてにたいして私個人として謝意を表しました。だからといって、彼の体制をすこしは許すことができるようにはなりませんでしたが、この体制が私にとって我慢ならない (unerträglich) ものであったことを、彼自身が知っておられました。彼の致命的な欠点は、純然たる人間蔑視を無遠慮に表明したことだったのです。

アルトホフがなした一連の策謀は、アルトホフの主観としては、ヴェーバーにたいする一種の《後押し》のつもりだったのかもしれない。しかしこれは、ヴェーバーにとってはありがた迷惑以外のなにものでもなく、だから彼は、この案件を、その渦中に置かれていた当時から、「あまりにも我慢ならない (zu widerlich)」,あるいは「小職にとってまことに不快 (für mich recht peinlich)」と評している (MWGII/2: 443, 476)。それでもなお、アルトホフの世話焼きにたいして、ヴェーバーは感謝の意を表している。しかしそれと同時に、アルトホフの人間蔑視が我慢の限界を超えていることをも、この書簡とこの回想に滲ませている。ヴェーバーのアルトホフにたいする感情は、個人的な感謝と激しい嫌悪と深い軽蔑の念とが混在したものであったのである。

アルトホフは、4月4日付返書において、フライブルク招聘についてすでにアルンスペルガーから通知が来たことを告げ、ヴェーバー割愛を確認し、承認している (GStAPK/FA-1005: 42)。このときアルトホフは、ヴェーバーが3日に送った書簡の内容を、翌日にすぐ確認しているのであって、前年10月頃から3月末までは、意図的に延々とサボタージュを続けていたことが、この事実からも明らかである。

アルトホフがようやく割愛を認めたことを確認したバーデン政府は、4月30日付で、ヴェーバーを正式にフライブルク大学哲学部正教授に任命し、この任命書にノックが署名している (GLA 235/43005)。

フライブルク移籍決定後の動向

一方、ベルリン大学法学部側は、ヴェーバーがフライブルクへの移籍を決めたことを、ラーバントを招聘するための転出だとみなしたと思われる。法学部からみると、ヴェーバーがアルトホフの手先として動いているかのように映ずるのである。1893/94年冬学期におけるヴェーバーの担当時間数は週5時間だったが、1894年夏学期に、彼は週13時間（講義5科目と演習1科目）もの負担を強いられている (VVB, 1894 SS)。これだけ多くの科目を押しつけたのは、ベルリンを去ろうとする彼にたいして法学部が敢行した報復だともていいだろう。

ヴェーバーは、この重い負担に耐えた後、ベルリンを去る。ヴェーバー夫妻がフライブルクに到着したのは1894年10月3日である (MWGII/2: 572)。そのすこしあとの10月20日付で、プロイセン文部大臣ローベルト・ボッセは、ラーバントに正式な就任要請状を送る。ところが、懸念されたように、やはりこの招聘計画を潰そうとする「喜劇的な奸計」が巡らされ、グナイストのほか、ヨーゼフ・コーラー、ハインリヒ・ブルンナー、オットー・ギールケ、さらに法学部外ではシュモラーも、ラーバント招聘に反対する。これをみたラーバントは、事を急がないほうがいいと判断し、ベルリン行きを先延ばしにし、アルトホフもまた、仕切り直しのうえ新たな計画を練ることに決める (Laband 1980: 98 f.)⁽⁵⁰⁾。

フライブルク大学移籍問題からみえてくるもの

1893年3月以来、紛糾し、迷走したこの案件は、ようやく（ひとまず）決着をみることになった。この紛糾は、アルトホフの無理な画策によって引きおこされた。アルトホフとアルンスペルガーとの長年にわたる確執を基調として、そこに、ベルリン大学法学部とラーバントとの確執、アルトホフとヴェーバーとの確執が加わり、各人の思惑が複雑に入りみだれる⁽⁵¹⁾。アルンスペルガーとフライブルク大学、ヴェーバー、ベルリン大学法学部からそれぞれ抵抗を受けたアルトホフは、そのつど方針転換を余儀なくされ、その方針転換によってまた各人が翻弄され、人事の様相が捻じまがっていく。アルトホフは、ラーバント招聘の実現という目的のために、他のすべてを従属させており、自分の行動によってバーデン政府とフライブルク大学とヴェーバーとが被る多大な迷惑をいっさい顧みなかった。そのなかで、アルンスペルガーとフライブルク大学とヴェーバーの三者は、相互に連絡をとり、アルトホフの迷走を冷静に観察し、共同歩調をとる。そしてアルンスペルガーは、時期を見誤ることなく果断に決定を下し、——時間はかかったが——首尾よくヴェーバーの獲得に成功したのである。

この案件は、ひとりの大学教員の去就をめぐる紛糾であるにとどまらず、第二帝政期ドイツの各大学が抱えていた諸問題が反映された事態であり、かならず当時の大学事情とかかわらせて理解しなくてはならない。また——ある意味では——そうした諸問題を独自の強権発動によって打開しようと試み、そのためには大学の自治を侵害し、教員の自由を奪い、法や規程や慣例を破ることも辞さなかったのがアルトホフであり、かかる特異な官僚カリスマがなぜ存在したのか——存在しえたのか——を考察する必要もある。

そこで、以下に、フライブルク大学移籍問題を通じてみえてくるドイツの大学の問題状況を、またアルトホフと彼の体制の問題性を解明し、これまでの研究蓄積を踏まえ、《大学問題とヴェーバー》にかんする研究の到達点を確認し、それによって、ザクセや今野元の陥った錯誤の所在を解明し、今日においてわれわれ歴史研究者・社会科学者が果たさなくてはならない課題について考察しよう。

(第Ⅱ章終わり、未完)

〔注〕

- ③② このアルトホフのメモは遺されていない。マリアンネは、後年、ヴェーバーの遺稿集をベルリンの公文書館に寄託しており、そのなかに含まれていたと推察されるが、この遺稿集のかかなりの部分は、第二次世界大戦末期の混乱のなかで韜晦した。彼女がヴェーバー伝(1926年刊)を執筆していたときには彼女の手許にあったので、ここに記されている「講師としての束縛はない」という文言は、アルトホフがこのメモ中に書いた表現をそのまま写したものであろう。
- ③③ この「秘密の交換証書 (Revers)」の問題については夙に上山安敏が論及していた(上山安敏 1968 (5): 36 頁)。この証書は、大量に作成されたものなので、印刷物であろう。証書に署名してアルトホフに提出すれば、それと引き換えにプロイセンの大学における職位が授与された。上山は、アルトホフの求めにおうじて、このときヴェーバーもこの証書に署名して提出したと推察していたが(上山安敏 1978: 43 頁)、実際には、ヴェーバーはこれを拒否した(MWGII/7: 307)。
- ③④ ザクセ(1857~1933)は文部行政官としてキャリアを積んでおり、プロイセン文部省に勤務した経験もある。彼は、この証書を入手しうる立場にあった。
- ③⑤ 文部官僚が、ひとつの大学のひとつの学部の特定の教授たちの講義配分にまで介入するのは異例である。これは、アルトホフが、ラーバント招聘にたいして強硬に反対しているハインリヒ・ブルナーとオットー・ギールケのご機嫌をとろうとしている事態だと解すべきであろう。またもちろんこれは、アルトホフが、大学の自治を侵犯し、みずからの大学支配を細部にいたるまで貫徹させようとしている事態でもある。
- ③⑥ ザクセと『マックス・ヴェーバー全集』書簡編第2巻における引用にあつては、この追伸は省かれている(Sachse 1928: 113, MWGII/2: 450, Anm.2)。そのため、この書簡が、マリアンネの指摘した日付偽装書簡であることがわからなくなっている。『マックス・ヴェーバー全集』書簡編第7巻にこの追伸の原文が掲載されているので参照されたい(MWGII/7: 308, Anm. 13)。
- ③⑦ 前述のように、同じ 1893/94 年冬学期に、ゲルハルト・シュルツェ＝ゲファーニッツがフライブルク大学哲学部員内准教授に任命されている。1893 年 6 月 8 日付任命書によると、彼の年俸は 2300 マルクであり、これに住居手当 620 マルクと赴任手当(転任費用) 500 マルクが加えられていた(GLA 235/43005)。
- ひとつ付言する。このように、ベルリン大学員内准教授の年俸がフライブルク大学のそれよりも低く抑えられているのは、ベルリン大学正教授の年俸を高く保つ代償だと思われる。この大学は、他の大学にもまして大きな格差構造を抱えているのであり、このこともまた問題である。
- ③⑧ 公式には、夏学期の終了は 8 月 15 日であるが、各大学の講義にかんするさまざまな記録から推察すると、夏の暑さを嫌って、これよりも早く終講するケースが多かったようである。ヴェーバーも、この学期の授業を 8 月 4 日に終えている(MWGII/2: 439, 449)。
- ③⑨ 現に、後述する 1894 年 3 月のラーバントとアルトホフとの合意によって、ヴェーバーのフライブルクへの移籍が、アルトホフにとってもっとも合理的な選択肢になった。
- ④⑩ 拙著中でこの書簡を引用したとき、日付を誤認していた(野崎敏郎 2011: 21 頁)。『マックス・ヴェーバー全集』によって訂正する。
- ④⑪ もちろん、ここにも当時の大学人事をめぐる重要な論点がある。員内職にある教員が、その邦国の文部行政担当省の承認がないと移籍できないというのでは、教職の自由が確保されているとは言えないからである。
- ④⑫ Zu den Erklärungen des Herrn Professor Dr. Max Weber (Heidelberg). *Karlsruher Zeitung*, Nr.300, 1. Nov. 1911, S.1. この宣誓書は、まず『北ドイツ一般新聞(Norddeutsche Allgemeine Zeitung)』(1911 年 10 月 29 日付)が公にし、その後いくつかの新聞に転載された。ここでは『カールスルーエ新聞』(同年 11 月 1 日付)に転載されたものから引用する。
- ④⑬ この督促状の現物は遺されていない。アルトホフは、このアルンスペルガーの督促状を隠滅した。

- これは、自分のサボタージュをしめす証拠だから、遺すわけにはいかなかったのである。
- (44) ここでは詳論しないが、この「某氏」はゾンバルトのことだと思われる。アルトホフとゾンバルトとの確執については、別途論述する機会をもつつもりである。
- (45) この「嘱託教授」は、前述のシュテンゲルの事例と同様、俸給のつく員内嘱託教授 (etatmäßiger Honorarprofessor) のことである。後述する客員嘱託教授 (nebenamtlicher Honorarprofessor) や正嘱託教授 (ordentlicher Honorarprofessor) だと、固定俸がないから、シュトラースブルク大学の現職正教授であるラーバントを招くことはできない。
- (46) 『大学人ヴェーバーの軌跡』を書いたとき、筆者は、1894年3月におけるアルトホフによるヴェーバー割愛手続の遂行が《アルトホフによるヴェーバーの追放》を意味することをまだ理解していなかった。この著作中では、アルトホフとシュモラーの人事計画が「なんらかの事情でうまく回らなくなった」か、「ヴェーバーの去就があまり意味をもたなくなったか」ではないかと記している (野崎敏郎 2011: 28 頁)。実際には、アルトホフが、シュモラーの反対を無視してラーバント招聘計画を強行し、これが本決まりになったので、ヴェーバーという《緩い蓋》を取りはずしてバーデン側に放りすてたのである。
- (47) 全集版のこの箇所に記されている „solches Privatgekolke“ は意味が通らない (MWGII/2: 11, 509)。いまミュンヘンでこの書簡の現物を確認することができないのだが、„solchen Privatgenossen“ (こうした縁故者 [を通じた裏工作]) ではないかと思われる。
- (48) 前記のように、この書簡を書いたとき、ヴェーバーはボーゼンで軍務に就いていたので、任地を離れるためには許可が必要だった。
- (49) ヴェーバーのこの書簡を受けとったアルトホフは、翌4月4日付返書において、4月6日にわざわざベルリンに来る必要はないと回答し、月末に軍務を終えてから来たらどうかと提案している (GStAPK/FA-1005: 42)。しかし、この返書がボーゼンに届くよりも前にヴェーバーはベルリンに移動しており (MWGII/2: 524)、6日に実際にアルトホフを表敬訪問した可能性が高い (ebd.: 521, Anm. 1)。なんといっても、アルトホフは、2月19日付アルンスペルガー宛書簡において、自分があたかもヴェーバーの移籍の意向を把握していないかのような虚言を弄していた。そこでヴェーバーは、直接ベルリンのオフィスに押しかけ、アルトホフに面と向かって、フライブルク移籍が自分の揺るがぬ決断であることを明言したのである。
- (50) その後のアルトホフの尽力にもかかわらず、ラーバントのベルリン招聘は結局実現しなかった。
- (51) アルンスペルガー (1837 年生)、ラーバント (1838 年生)、シュモラー (1838 年生)、エック (1838 年生)、アルトホフ (1839 年生) は同世代に属しており、とくにアルンスペルガーとアルトホフは、ライバル官僚として意識しあっている。

〔未公開史料〕

GLA 235/43005: Badische Universität Freiburg. Generalia. Dienste. Rechts- u. staatswiss. Fakultät. Die Besetzung der Lehrstühle der Nationalökonomie, Finanzwissenschaft und Volkswirtschaftslehre sowie die Direktion des Kameralistischen Seminars betr. Teil II Jahr 1870-1937. Generallandesarchiv Karlsruhe

GStAPK/FA-1005: VI. Hauptabteilung, Nachlaß Friedrich Althoff, Nr. 1005. Geheimes Staatsarchiv preußischer Kulturbesitz

〔文献〕

Laband, P. 1980: *Opuscula juridica, Bd.1. Abhandlungen, Beiträge, Reden und Rezensionen, T. 1. Lebenserinnerungen, Abhandlungen, Beiträge und Reden (1866-1918)*. Zentralantiquariat der DDR

- LB1: Weber, Marianne 1926: *Max Weber; Ein Lebensbild*, 1. Aufl. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck)
- LB2: Weber, Marianne 1926/50: *Max Weber; Ein Lebensbild*, 2. Aufl. Heidelberg: Schneider. 大久保和郎訳 1963『マックス・ウェーバー』みすず書房
- MWGI/13: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Bd.13. Hochschulwesen und Wissenschaftspolitik. Schriften und Reden 1895-1920*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2016
- MWGII/2: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. II, Bd.2. Briefe 1887-1894*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2017
- MWGII/7: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. II, Bd.7. Briefe 1911-1912*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1998
- Sachse, A. 1928: *Friedrich Althoff und sein Werk*. Berlin: Mittler
- VVB: *Verzeichnis der Vorlesungen*. Königliche Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin
- 上山安敏 1968「ドイツ第二帝政の権力構造——とくに社会史的視角からの寄与——(1~5)」京都大学『法学論叢』83(1), 83(2), 83(4), 83(5), 84(2)
- 上山安敏 1978『ウェーバーとその社会——知識社会と権力——』ミネルヴァ書房
- 上山安敏他編 1979『ウェーバーの大学論』木鐸社
- 野崎敏郎 2011『大学人ヴェーバーの軌跡——闘う社会学者——』晃洋書房
- 野崎敏郎 2016『ヴェーバー『職業としての学問』の研究(完全版)』晃洋書房
- 野崎敏郎 2016-「『闘争する人格』と大学問題——『職業としての学問』をいかに読むか——(1~5)」『佛教大学社会学部論集』63, 64, 65, 67, 69 (未完結)

〔付記〕

本稿は、令和 3~5 年度科学研究費(基盤研究(B), 課題番号 21H00783)による研究成果の一部である。

(のざき としろう 公共政策学科)
2021 年 4 月 30 日受理

〔第 72 号正誤訂正〕

51 頁下から 5 行目

誤: 1983/94 年冬学期

正: 1893/94 年冬学期